

## ハルトプライズ学内大会 運営メンバーインタビュー

本学初の「ハルトプライズ 2020 学内予選」を企画・運営したグローバルスタディーズ学科 2 年次生の前田 響さん、宮武 愛海さん、小杉 成さんの 3 人。開催までの苦労やエピソードをインタビューしました。



宮武 愛海さん（プロジェクトマネージャー）、前田 響さん（運営代表）、小杉 成さん（広報/SNS）写真左から

ハルトプライズ学内予選（以下、ハルトプライズ）を終えた感想を聞かせてください。

前田：やっと京都外大でできたって感じです。僕は日本で初めてハルトプライズと関わってから 3 年が経ちました。

小杉：とてもホッとしています。京都外大では初めての試みということもあって、いろいろ手探りで少しずつ 8 月末から進んできました。僕自身、イベントを 1 から作りあげることが初めてで、何もわからない状態から 2 人についていく形でスタートしました。失敗やダメ出しをくらいながらも少しずつ準備を進めてきました。当日は反省もありながらも、成功させることができました。正直、本当にやり遂げたという実感がありませんが、成長できたと思います。

宮武：私は観客がハルトプライズに興味を持つようにイベントを作り上げるというところに注力しました。学生だけではなく、教授、職員の皆さんに興味を持って頂けるように。事前のワークショップや当日の関係各位への声かけにも努めました。結

果として、観覧者から「来年は出てみたい！運営チームに入りたい。ボランティアがしたい」などの感想が聞けたこと、教授から「授業の一環に取り入れたい」と前向きな意見を示していただけたことが、一番の成功だと思います。

## なぜ京都外大で開催しようと思ったのですか？

前田：まず学生が「新しいことに楽しく挑戦する場」と「失敗できるのが当たり前」の2つを外大で広めたかったからです。

小杉：社会にインパクトを与えるためにビジネスアイデアを考案することで、外大から「Changemaker」を生み出したいという思いと、新しいことを始めたいということから開催を決めました。

宮武：アイデアを考えてシェアする・形にしようとする事の大切さや大変さを学生のうちに知ることで、勝つ・負けるは関係なく、今後社会人になる際の経験になると思ったというのが1つ目です。また、外大で英語を勉強しているにも関わらず、生かす場所が少ないと感じ、アイデアをシェアしたいという情熱が英語をブラッシュアップする動機になればと考えたからです。

## 開催は「他人のため」という気持ちがあったのでしょうか？

前田：他人のためですね。大学の授業をただ受けるのではなく、自分たちで動いて行動して学ぶこともあると思うんですね（そのような場所が今の京都外大には少ないので）。そこで得ることのできる経験だったり、失敗だったりというのは、その人にとっての良い人生経験になると思っています。

小杉：京都外大になかった物を新しく作るということにとっても興味がありました。また、学生が何かの本気でチャレンジ、失敗、そして成功を経験してみんなが成長できる場を作りたいという思いもありました。

宮武：わたしは、今年度の東京リージョナルサミットに参加して、ハルトプライズのインパクトを直に受けました。サミットが終わっても続く人とのつながりや、自分の成長などを、ほかの外大生にも実感して欲しいという思いが強かったです。

## 今後の目標や決意など、最後に一言お願いします。

前田：ファンレイジングと京都近辺のマスコミ探しに困っているので、助けてください笑

小杉：1から始めたことがようやく形になってきました。ここからが本当の始まりだと思います。今後は現在の段階からイベントをさらにグレードアップしていきたいです。そして、外大から「Changemaker」を生む手助けをしたいです。

宮武：チャレンジする事、アイデアを語る事、ハルトプライズに挑戦すること、そのすべてにお金はいりません。生徒の皆さんが気持ちだけ持って参加しに来てください。